

■最前線をゆく3氏の講演会&シンポジウム

幕末・維新史研究者による「司馬遼太郎作品」論

約60年以前の創作にどう向き合うか



町田明広氏
神田外語大教授

戦 後日本人の歴史認識の形成に多大な影響を与えたのは、司馬遼太郎による「司馬史観」であった。その世界観は、「国家よりも個人」「理念よりも志」を基調とし、幕末・維新の英雄たちを近代化の担い手として描いた。

一方で、近年の歴史研究は様々な史料・文献などに基づく実証分析を通じて、司馬史観の物語的構造を再検討しつつある。演者のこれまでの幕末政治史の研究は、この点を意識したものである。

本講演では、薩摩藩および島津久光を素材にしながら、両史観の方法論的・思想的相克を考察することを目的としたい。



司馬史観と町田史観の相克 —薩摩藩・島津久光を素材にして

司馬遼太郎のつくった新選組を考える —「政治」をキーワードとして

中村武生氏
京都女子大非常勤講師



司馬は新選組を政治から切り離した。なぜなのだろう。それを考えた

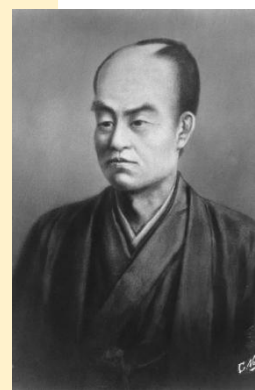
現 在の新選組イメージをつくったのは司馬遼太郎の小説といってよい。『新選組血風録』『燃えよ剣』等である。過言ではない。演者も中高生のころ愛読した。しかしどれだけおもしろくても創作物なのである。

演者はいま研究者として新選組と対している。信用できる同時代史料等によって幕末史に位置づけようとしている。キーワードは「政治」である。彼らを政治家集団とみている。



戦争から遡及する歴史「物語」 —司馬遼太郎『花神』を手がかりに

竹本知行氏
安田女子大教授



二項対立史観にあるというのが一般的評価である。しかし、歴史は連続性を持つものであり、「明治」から独立して「昭和」は存在しない。

司馬による「明治」の誕生の物語を詳細に追えば、それとの連続と非連続を確認することで、彼における「昭和」の姿が浮かび上がってくるはずである。そして、そこから彼が自らの旺盛な執筆活動の原動力として述べた「一九四五年八月の自分自身に対する手紙」という言葉に込めた思いを明らかにすることができるのではないか。



司 馬遼太郎の歴史小説に見られる歴史観の特徴はといえば、いわゆる「明るい明治」と「暗い昭和」という

第2部・シンポジウム

司馬作品には多くの誤謬が見える。だからといって彼の作品の価値が損なわれるものではない。3氏に共通する「読み手の意識変革がなければ、作品価値を損ねてしまう」という認識を基に、希代の作家の姿とその作品を考えていく。

【コーディネーター】朝山大吾（よみうりカルチャー）

2026.3.29 (日)
11時30分～16時30分（開場11時00分）

【会場】東京国立博物館平成館大講堂

（JR上野駅公園口・JR鶯谷駅南口から徒歩10分）

【参加費】会場 6,600円 動画視聴 5,500円

【定員】会場 300人（申込先着順定員に達し次第受付終了）
※各氏の講演は70分、シンポジウムは60分を予定。
※「動画視聴」は同時中継ではなく、後日の配信（1か月間）です。
※会場参加の方にも配信動画をお送りします。
※会場は「自由席」です。
※参加者には「お楽しみ」があります（会場・動画視聴とも）。
※施設内では食事ができません。昼食をお済ませの上ご参加ください。

●講座詳細・申込み方法はQRコード（よみカル HP）から



主催 よみうりカルチャー お問い合わせ ☎03・3642・4301 担当：朝山（新選組幕末講座担当）